

動作の解釈を考える

関西医療大学大学院 鈴木俊明

理学療法評価において動作分析は重要となる。動作分析をする際には、患者の動作を観察することから始まる。動作を観察し、その動作が正常動作とどのように異なっているかを明確にする必要がある。正常動作と異なっている動作の全てが問題であるかというところではなく、その動作に必要な代償動作として行っている場合もある。

セラピストにとって、患者が行っている動作が異常動作なのか、代償動作であるかを見極める能力は重要であり、そのためには、「動作のストーリーをつくる」ことが大切となる。

例えば、上肢挙上運動で、肩関節屈曲 120° 以上で体幹の同側回旋運動を認める患者を想像していただきたい。上肢挙上運動で体幹の同側回旋運動は正常動作には認めないが、この動作は異常動作であると判断してよいのであろうか。この体幹の同側回旋運動は、異常動作でなく動作に必要な代償動作である場合が多い。上肢挙上運動での正常な運動は、肩関節屈曲角度の増大にともない肩甲上腕関節の動きだけでなく、肩甲骨の上方回旋が多く必要となる。患者において、肩甲骨の上方回旋の動きが乏しければ、上肢挙上運動において体幹の同側回旋運動をともなうことは十分に考えられるわけである。また、肩甲上腕関節での動きが制限された場合にも、上肢挙上運動を行うために体幹の同側回旋運動が必要な場合もある。このように動作のストーリーを考えることで、健常者が行う正常動作と異なっている動作が異常動作であるのか、動作に必要な代償動作であるかを判定する能力が重要である。

私の基調講演では、このような動作解釈で必要な考え方をお話しさせていただく予定である。